

セミナーX不安 Angoisse について

—— objet (a) の導入

保科 正章

私は皆さんに今日、ラカンのセミナーのある一節を詳しく註釈する試みをします。セミナーX巻「不安」の十七講「口と眼」の冒頭を取り上げます。この試みは宇波彰先生が「ラカンの記号空間」(『言語文化』第二十六号)で述べられておられる the *baiss* of a *line-by-line reading* というメソッドにしたがうものです。一九六三年五月十五日のこの講義は、ラカンが初めて日本に旅をし、どこかの、奈良なのか鎌倉なのかはつきりしませんが多分奈良と思われるお寺で如意輪観音に出会い、その伏せられた臉に感銘をうけたことが語られた十六章「仏陀のまぶた」に続くものです。(Seuil 版のセミナーには奈良、東大寺の大仏の写真が読者の便宜のために掲載されていますが、五月八日「仏陀のまぶた」と題された講義で話題にされるものは大仏ではなく如意輪観音です)。

「不安のセミナー」はセミナーXI巻「精神分析の四つの根本的概念」に先立つものです。だから「不安のセミナー」は国際精神分析協会 I P A からの破門、Excommunication の直前になされたものであり、このセミナーのあいだラカンの弟子たちと国際精神分析協会のあいだで様々な交渉 *negociation* が行なわれた時期にあたります (cf. *Séminaire XI*, p.10)。「精神分析の四つの根本的概念」はその場をサンタンヌ病院から高等師範学校へと変え、聴衆も、これまでの精神分析家、精神科医が中心のものから、ジャック・アラン・ミレールを始めとするアルチュセリアンの若き俊英たち、さらに公衆 *public* に変わったものであり、ラカンの訓えのまるで嚆矢であるかのように、ラカン入門であるかのように語られます——
——実際これが最初に正式に出版されたセミナーです——し

かしながら、セミネールXI、このきわめて難解なセミネールは、フロイトが一般の聴衆にたいしておこなった『精神分析入門』Vorlesungenとはまったく異なるものです。ラカンは聴衆にあわせて自分の進展を遅らせたり、逆戻りさせる教育者 *Pédagogue* ではありません。セミネールXIはこの「不安」のセミネール、そして翌年一度だけおこなわれた「父の名」のセミネールの延長にあります。ここで焦眉の問題が *Objet (c)* の導入であり、これまでのラカンの理論的パースペクティヴを逆転させたと言っても過言ではないものです。「不安のセミネール」でラカンはキルケゴールの著作、「不安の概念」に言及していますが、最後には「不安は概念ではない」ことが述べられるにいたります。だから概念 *les concepts fondamentaux* についてラカンはセミネールXIで語ります。概念とはなにか？それはシニフィアンによってル・レール *le réel* をとらえる道具である *instrument de la prise symbolique sur le réel* 「不安のセミネール」にこの表現があります。そしてここから、ますます以後のセミネールにおいてシニフィアン、ル・サンボリックの網からこぼれていく、*Objet (c)* のプロブレマティックが全面にでてくるようになります。

ここで私は精神分析の対象とはなにかについて、ラカン以前の精神分析の歴史について少しふりかえりましょう。

フロイト、精神分析の創始者の「性理論」についての三つの論考「*drei Abhandlungen zur Sexualtheorie (1905)*」「性欲論

三篇」が通名のもは、まるごと対象の発見についての研究であると言うことができます。同性愛、いわば全体的性対象の——いやむしろ全体的対象 *objet total* は存在しないと言いましよう、なぜなら同性愛における愛のあるいは欲望の対象がなにかについてはフロイトははっきりと男性同性愛対象ではファルスであると明言します——論考に始まり、幼児性欲の精神分析的調査においてオラル、アナル、フェリックと形容される部分対象、名前をあげれば乳房、糞便、ファルスが論じられます。さて皆さん、次のフロイトの決定的なテーゼを銘記せねばならないことをいくら強調してもしすぎることはありません。第三部第五章で発せられます。「対象の発見はじつは再発見である」。Die Objektfindung ist eigentlich eine Wiederfindung。再発見されねばならない対象、「失われた対象」、これがラカンにとつて、「不安のセミネール」まで、一九六二年の一〇番目のセミネールまで——これは決して短いものではありません——唯一の導きの糸でした。セミネール一巻「フロイトの技法論」のほぼ初めからフロイトの「否定」*Vernennung* の註釈がなされますが、ここでも焦点は「失われた対象」にあり、四巻「対象関係」ではファルスの主題として、八巻「転移」でアガルマという主題として扱われている問題の背景にはこの「失われた対象」のプロブレマティックがあり続けます。そして「不安のセミネール」で *Objet petit (c)* の構想によってこれを越える、というより逆転させる試みが始まります。

しかし今はもう少しフロイトに始まる精神分析の歴史にとどまりましょう。精神分析の歴史は、naturellementには、自然には（当然のことながら）、失われた対象、この欠如の直視には向かいません。部分対象の主題はカール・アブラハム K. Abraham によって継承されます。アブラハムはメラニコリ、躁うつ病の臨床、これら精神病の成因 *genèse* という問題意識から部分対象の考察にはいります。問題意識が論述を決定 *déterminer* すること、これを念頭においてわれわれは、各精神分析家の優劣を論じるようなパスベクティヴには陥らないようにしましょう。アブラハムは、精神病は幼児期の発達段階への固着であると考え、低年齢の子供の観察に道を開きました。そしてこの線上に登場するのが、部分対象、とりわけ乳房について高名な理論を構築したメラニー・クラインです。アブラハムの分析をうけたクラインは、さらにラディカルに精神病の起源を求め、子供たちの精神分析を推し進めます。そしてフロイトが大人の分析から無意識の幼児性欲を析出させたように、子供の分析からその無意識的ファンタジーである最早期の乳児期の対象関係、良い対象と悪い対象、良い乳房と悪い乳房の主題を析出させます。

メラニー・クラインは初期のラカンによって、ラカン以外には彼女だけが二〇年代のフロイトの理論的大変革、欲動の新たな二元論（生の欲動／死の欲動）を——それ以前は自己保存欲動と性欲動——継承したことで承認されます。クラインに

よれば、欲動のこの二元性 *duale* は、主体の生命の起源に *un civrage de l'objet*、対象の分割を導入します。この分割 *civrage* が良い対象と悪い対象のあいだにあります。クラインにおいて対象は、乳房、糞尿、あるいはベニスのように部分的であつても、あるいはこれが人格とまざりあい全体的 *total* であつてもつねに、ここが重要ですが、イマゴ、無意識のファンタジーのイマージュです。そしてこのイマージュは主体によって摂り入れ *introjection* のメカニズムによって自我へと統合されます。

ラカンはクラインの理論が徹頭徹尾イマジネールであり、サンボリックの次元がないということを批判します。そしてクラインにおいて良い対象、悪い対象が主体にとつていわばあらかじめあり、失われた対象という契機がないことを批判します。「良い対象、悪い対象があらかじめあるものではありません、あるのは良い、悪いだけです」。ラカンは「倫理のセミネール」のどこかで述べています。ここで、あるのは良い、悪いだけです、と言われているのはサンボリックの意味であつてオントロジックなそれではありません。原初的 *Fora-Da* を思い出してください。だから、オブジェという語の共通性から、クライン理論とラカンの *l'objet petit a* を比較することには無理がありません。鏡像段階論と比較はできるかもしれませんが。向井雅明氏が提唱するよう「ラカン対ラカン」で進むべきです。

しかしながら、象徴的去勢 *la castration symbolique* の優位 *Primat* をこれまで全面にだしていたラカンは、「離乳、腸内容

の排出、去勢」のシリーズ、一見するとフロイトークライン路線と見えるものをひとつひとつ、「不安のセミネール」の第四部で取り上げなおすかのように展開していると言うことはできません。ここで導入されるのが切断 *la coupure* という概念装置です。しかし今日の私の話はここまで行けないでしょう。

ジャック・ラカンの「不安のセミネール」の第十七章「口と眼」*la bouche et l'oeuil*の最初の部分を註釈します。できるかぎりラカンの言表の言表行為の次元をとりもどす努力を、これが不可能であることを承知のうえでおこないたいと思います。少なくとも皆さんにラカンのパロールのただ一部分、さきほどのフロイトの *Die Objektfindung ist eigentlich Wiederfindung* のような線 *le trait* *le trait unaire* のようなものとは違い、プロクで聞いているだけという利点があります。

第十七章は、先立つ十六章「仏陀のまぶた」から始まる、このセミネールの第四部に属するものであり、第四部は *les cinq formes de l'objet petit a* 「対象 *a* の五つのかたち」と題されています。五つのかたちがなんであるかはただちに申し上げましょう。乳房、糞便、ファルス、まなざし、声です。まなざしと声がラカンによって対象のリストに新たに加えられました。これが意味するのは、まなざしと声、少なくとも精神病理現象としてラカンにとってこれまでも重要であったものは、ここで新たな理論的吟味にかけられることです。

なぜ「口と眼」なのでしょう？ なぜ「対象」である乳

房とまなざしではないのでしょうか？ このことがこのセミネールの理解の大山です。十六章は「まぶた」でした、十章は「耳からはいるもの」*ce qui entre par l'oreille*と題されます。このセミネールでは器官 *l'organe* が問題になります。この狙いの射程をごくごく手短かに申しますと、精神分析の対象論は、一方で欲求 *Desoin* の対象へと—その最たるものが乳房、これなくして生物は生きられません—他方では道徳的愛の対象—ジェニタルな対象、全体的、全人格的パートナーとしての対象にすべりこんでいきました。後者がいわゆる「対象関係論」です、対象関係とは実は人間関係なのです。しかしラカンはこのセミネールから、欲求でなく、さらにこれまで論じてきた欲望でもなく、欲動 *la pulsion*、フロイトの *Trieb* の対象を論じることになりました。だから欲動の源泉である器官が問題になります。これについてはフロイト「欲動とその運命」を参照してください。そして欲動の満足がジュイサンスと名づけられ、欲望とは区別されることになりました。

十七章「口と眼」は次のように始まります。

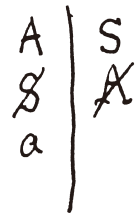
「フロイト理論における対象たちのリスト、オラル対象、アナル対象、ファルス対象——ご存知のようにジェニタル対象がここで均質であるとは私は思っていない——これらは補完すべきです。

というのは、その *と* しての場によってその機能にお

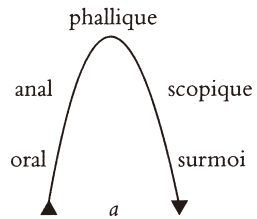
いて定義される対象、主体と *Autre* の弁証法の余りとして機能する対象は、欲望のフィールドでは別の水準、*a d'autres niveaux* でさらに定義されるべきです。私が講義ですでに端緒をしめたこと、とりわけ今年の講義におけるすべてがこのことを皆さんに示唆しています」。

いったん切りましょう。第一段落、まなざしと声が対象のリストに補充されます。ラカンは精神分析的発達論には反対します、なぜならそれは精神分析理論とは徹頭徹尾両立しません、フロイトの発達論的にみえもするシエーマは全然、年代的 *chronologique* な発達を意味しません。どこでもよいのですが、先ほどの「性理論三篇」の前書きを読むだけで、ここで述べたのは成人の精神分析作業からの構築であり、子供の観察や進化論的思弁からきたのではないことを明確に述べています。*objet genital*、性器期対象と翻訳されているもの、ラカンはジェニタル *genital* な時期を——つまり成人ということになるのでしょうけれども——認めませんが、かりに *objet genital* があるとしたら女性 *la femme* であろうと言います。両性にとつて！ *La femme* という主題がさらに後期、ほとんど全面にでてくるという噂は皆さんご存知でしょう。確かに乳房、糞便、ファルスと女性はいずれも *homogene* ではありません。

第二段落の説明が少し図式的になるのはごめんなさい。ふたつのシエーマがあります。



Premier schéma de la division
分数の最初のシエーマ



Les formes stadiques de l'objet
対象の段階的かたち

ひとつは本書の第二章からすでにあらわれのもの、もうひとつは二十二章「アナルから理想へ」で黒板に書かれます。前者は主体の *Autre* のフィールドへの記入を描いたものです。割り算 *la division* のシエーマとなっています。 *Autre* が主体で割られると余り *le reste* が残ります。この余りが *l'objet petit a* です。主体はシニフィアンによって代表される以上、「一」と *l'un* と想定することは可能です。他方、シニフィアンの場である *Autre* は割り切れないもの、余り *le reste* を包含します。 *Autre* は *les uns* の集合ではありません。 *Autre* のうちにはシニフィアンでないものがあります。このシエーマはセミネール XI で「疎外と分離」として取り上げられるものプロトタイプです。

第二のシエーマは *les formes stadiques de l'objet* (対象の段

階的かたち」と名づけられています。これをいま詳述することはできません。これからラカンが十八、十九、二十、二十一章で述べることの要約としてのシエーマですから。ただし別の水準で *d'autres niveaux* と言われているもののイラストレーションを与えてくれます。

「例えば、まだ大雑把であれ、私はすでに皆さんが、イマージュの虜になる欲望は、眼のフィールドで突発する切断 *coupure* の関数であることを感じるため、十分な指摘をしました。さらに別のもの、これはわれわれがすでに知っていることよりはるかに遠くに行きますが、これまで範疇的と言われる命令の私たちで謎であったものであり、われわれはここにも根源的確信の性格を確認します、すでに伝統的哲学が目をつけ、カントによって道徳意識のかたちで論述されました。範疇的命令に『の』角度で着手するとわれわれはこれがあるべき場 *à sa place* に位置づけることができます」。

さあここです。前半で言われているのは例のサルトルの覗きの逸話です。ある男が鍵穴から隣室を覗いている、彼はいわば全身まなざしとなっています。そこになんでもよいのですがかさつという音がして、彼自身をまなざすまなざしが突如出現します。この後者のまなざし、外界に突然出現するものが *objet*

Petit a としてのまなざしです。決して窃視者のまなざしがそういうものではありません。後半はカントが「実践理性批判」で提示する「汝の意志の格律が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当するように行動せよ」は道徳的法則であるが、言表内容の次元の彼方に、命令、声としての *objet a* の次元を包含することが言われています。上のシエーマの超自我です。まなざし、声、ラカンが対象のリストに新たに加えるものが、先にも述べました、注釈妄想、幻声として精神病理学現象にも大いに関わるということよりさらに、私がここで強調したいのはラカンのデイスクールの構築のメデイウスの環のような振れです。この言明がこれから乳房という部分対象としてすでに知られているものを論じる講義の冒頭におかれていることは、ミクロコスモスとしてこのセミネール全体の振れを表象するものです。まなざし、声、*Objet petit a* としてあとから加わったものがここに前提としてあり、ここから旧知の部分対象が考察されることは、ラカンの *l'objet petit a* は、部分対象の理論からの展開ではないかという先入観をくだきます。逆であって *l'objet petit a* から部分対象理論は再検討されます。ラカンは次回の講義でこの振れた進行は「本質的に私のこのメソッドは着手された対象と区別できないことがわかりになるでしょう」と述べています。私は「反復」についての拙論でこの振れの構造がセミネールXIの構造であることを論証しました。(IRS ジャック・ラカン研究、第六号 二〇〇七、180-194頁)

「私が今年不安から進むことを選択したのは、この道が欲望の弁証法を再生 *revivifier* するから、この道のみが欲望にたいする対象の機能に新たな光を導入するからです。

前回の講義は、ある種の救済 *salut* を構成せんとする人間経験のあるフィールド、仏教経験が、その原則に、欲望はイリュージョンであることをいかに措定できたのか述べたかったのです。

どういう意味でしょうか。「すべては無である」*tout n'est rien* という断定の早急性 *rapidité* を笑うことは容易です。私は仏教においてはこの意味ではないと述べました。しかし欲望はイリュージョンにすぎないという主張はわれわれ（分析家）の経験にとってひとつの意味をもつのであり、どこからこの意味が導入されるのか、そして一言で言えば、どこにルアーがあるのか知らねばなりません。

欲望を、私は皆さんに、切断 *coupure* の機能に結びつけ、余りの機能 *la fonction du reste* と関係させることを教えてください、余りが欲望を支え、活気づけます、これをわれわれは部分対象 *l'objet partiel* の分析的機能において学びます。満足が結びつく欠如はこれとは異なります。 *Autre chose est le manque auquel liée la satisfaction.*

この欠如と現実態の欲望 *désir en acte* の機能との距離、非一致 *la non-coïncidence*、欠如はファンタスムそして主

体と部分対象との関係における動揺 *vaiçillation* によって構造化されます、この距離、非一致が不安を創造 *Créer* します、不安だけが、この欠如の真理に照準をあわせます。だから、欲望の構造化の各段階で、われわれが欲望の機能でなかに問題になるかを理解しようとするのなら、われわれは不安ポイントを測定せねばなりません。

これがわれわれを背後に立ち戻らせます—われわれの経験によって命じられる運動です。なんとなればすべての進展は、あたかも、フロイトはある袋小路、去勢コンプレックスのそれにぶつかった、分析理論は逆流として、理論、欲動の最もラディカルな働きを、オラルな水準に求めるようにさせる後戻りを経験したかのようです。さて、この袋小路、私はこれを見かけ *apparente* でしかないと、そしてこれまで決して乗り越えられていないと申し上げます。

私が今日言うべきことはわれわれにおそらく、フロイトの去勢コンプレックスの暗礁 *la butée* がなにを意味するかに関するいくつかの断定 *affirmations* についての結論を述べさせてくれるでしょう」。

ご存知でしょうか、フロイトは最晩年の一九三七年「終りある分析と終りなき分析」を書きました。フロイトは分析の完全な終結を各症例に求めるような楽道家ではありません。しかし、この論文の第八章、終章で「終りある分析 *die*

「endliche Analyse」として、去勢不安に突き当たることを精神分析の限界、袋小路として論述します。この限界は男女ともに出現し、女性では *Pensneid*、男性では男性的抗議、受動的態勢への反抗として現れます。そして「しばしばうける印象はペニスナイドと男性的抗議とともに、われわれはすべての心理学的階層を貫いて、*gewachsenen Fels*、自然の岩盤にまで到達した、われわれの活動の最後にきたというものである。これはそうであろう、なぜなら心 *das Psychische* によって生物学 *das Biologische* が実際に基層にある岩盤の役割を演じている。女性性の拒否 *die Ablehnung der Weiblichkeit* は生物学的事実にはかならない」と書いています。ラカンはこの精神分析の終結の問題には初期から着手しています。彼にとって IPA のような所定の時間、期間をすぎれば教育分析を卒業できるというアイデアは唾棄すべきものですから当然です。そして *la passe* という制度を確立するにいたります。「不安のセミネール」までの彼は去勢不安が分析の終結であることを前提に論じていました、しかしこのセミネールから「去勢コンプレックスの彼岸」が問題になります。明らかにフロイトの限界を超える試みがなされるようになります。ここで私は手短かに、去勢不安、フロイトにとつての袋小路を、「対象関係のセミネール」で導入された *privation, frustration, castration*（剥奪、欲求不満、去勢）を援用することで、去勢不安は男性にとつても女性にとつても、女性の、*Autre* の、こゝでは母親のファルスの欠如を前にした

不安であると言いましよう。

精神分析はしかし去勢をシリアスには取り上げず、ますます顔を背け、オラルな対象、乳房の方に歩みよっていきます、この原動力が上に述べたメラニー・クラインです。クラインの、乳房との関係における「抑鬱ポジション」がますます全面にできてきました。ラカンは乳房を「対象関係のセミネール」でフラストレーションの欠如の対象として、上で言われた満足と結びついた欠如として取り上げました。これは余り *le reste* としての対象とは異なることがはっきり述べられています。だからこの不安のセミネールでの乳房は、対象関係のときのそれとは異なることが予告されています。

私の註釈の試みはこのあたりで今日のところは終えねばなりません。

皆さんには私が「欲望の弁証法を再活性化する」、そして仏教の言及のあたりを完全に無視したように見えたかもしれませんが一言だけつけくわえましょう。ランガージュのラカン、メタフオール、メトニミーが主要概念であったこれまでのラカンにとつて、欲望はメトニミーであり、欲望の対象はつまるどころ無 *desir de rien* でした。その最終レフェランスが母のファルスの不在、(—φ) でした。だから欲望は幻、色即是空という仏教の訓えともごだましていました。ラカンは決して仏教に否定的な考えをもっていません。しかし「どこにルアーがあるかを知らねばならない」、これは仏教にとつても本質的であると思わ

れます。

欲望の弁証法を *revivifier* する、転移のセミナー (1960-61) は「最初に愛があった」という章からはじまり、転移の対象「アガルマ」*agalma* が構築されました。しかし不安のセミナーは不安 *angoisse* から出発し、*l'objet petit a* が、どう言えはよいのか、切断によって摘出されます。つまり欲望の弁証法が間違から進展します。どうもご清聴ありがとうございました。

付記

当日、明治学院大学教授四方田犬彦先生から、母の去勢の、上で述べたネガの側面ではなく、ポジの側面、女陰について、フロイトの「無気味なもの」*Das Unheimlichkeit* (1919) との関連においてきわめて示唆に富む質問をいただいた。これ

は私が図2を提示することで引き起こすかもしれないと危惧していた誤解を明確にする機会になった。ラカン自身この「不安のセミナー」の三章「コスモスから無気味なものへ」四章「去勢不安の彼岸」で「無気味なもの」を取り上げているのであるが、四方田先生の質問は図2が含意してしまいかもしれないシステム化によってこぼれおちるものに目を向けさせるものであった。システムから余剰するもの、これこそがラカンの *l'objet \mathbb{P}* のプロブレマティックであり、だからこそメビウスの環のよきな論述の進展があるともう一度繰り返し返しておこう。

この報告は二〇〇九年十一月十四日明治学院大学で開かれたロック「ラカンについて考える」で口頭発表されたものです。